

# 初期ラッセルにおける観念論論駁

伊藤 遼

京都大学博士課程

よく知られているように、19世紀の終わりから20世紀にかけて、G. フレーゲやG. ペアノの手によって、論理学における「革命」がおこった。すなわち、アリストテレス以来の三段論法に代わる、述語論理の登場である。

ペアノからこの新たな「論理」を学んだ、ケンブリッジの哲学者 B. ラッセルは、解析学を論理学へと「還元」という「論理主義」の立場を提示する。『数学の諸原理』（1903）は、論理主義を展開するにあたって必要な諸概念について、哲学的に論じたものである。それ以降、ラッセルは、ラッセル・パラドクスをはじめとする諸々のパラドクスを避けつつ、論理主義を実現するために、さまざまなアイデアを提示することになる。なかでも、「表示について」（1905）において提示された、いわゆる「記述の理論」は、ラッセルにとって最も重要なアイデアとなった。そして、その歩みは、A. N. ホワイトヘッドとの共著『プリンキピア・マテマティカ』（1910-1913）において、ひとつの完成をみる。

こうした10年にわたる歩みの中で、ラッセルが残した多くのアイデアは、現代の論理学、および、いわゆる分析哲学に多くの影響を与えている。とは言え、ラッセルが残した「論理」は、現代のわれわれからすれば、いくらかの点で、素朴なものに思われる。ラッセルにとって「論理」とは、われわれが置かれたこの世界の「構造」に他ならず、メタな視点からの考察が可能なものではない。それゆえ、ラッセルには、対象言語とメタ言語という区別はみられない。こうした点から、ラッセルの『プリンキピア』は、形式的な精密さという点で、フレーゲに比べて「かなりの後退」であると言われてきた。

しかしながら、Hylton(1990) が指摘するように、ラッセルのこうした「論理」の捉え方の意義を正しく見積もるためには、歴史的・哲学的な文脈を考慮する必要がある。ここで意図されているそうした文脈とは、ラッセルおよびG. E. ムーアによる、イギリス観念論論駁の試みである。よく知られているように、ラッセルは、関係の外在性を確保することによって、原子論的な世界観、Hylton(1990)の表現を借りれば、‘Platonic Atomism’ が支持されると考えていた。本発表では、こうしたラッセルによる観念論論駁の試みを、「論理」の転換という観点から捉え直すことを試みたい。

(P. Hylton (1990) *Russell, Idealism, and the Emergence of Analytic Philosophy*.)